

『孫子』から考える日露戦争

岩 崎 瞳

一 はじめに

今年度、漢文ゼミでは『孫子』に挑戦した。昨今、ビジネス書なども注目していたことも一因として挙げられる。

『孫子』を読んでいると、自然、その実戦・実践というものに興味があった。今回のレポートでその実戦を取り扱うことにしたものの、『史記』といった古典の中の戦争を取り扱うのは、文学作品として狭いということ、近代の戦争からというアドバイスを先生からいただいた。近代の戦争というと、日清、日露、第一次・第二次世界大戦の四つが真っ先に思い浮かぶ。

今回着目したのは日露戦争である。ちょうどその四十年後、日本が第二次世界大戦敗戦を迎えたことを思うと、軽く見過ごしてはならないからだ。

二 『孫子』概略

平成十九年のNHK大河ドラマは『風林火山』である。「風林火山」と言う言葉は、武田信玄の軍旗に用いられ、今でも座右の銘として使う人は少なくない。

ただ、この言葉は武田信玄の言葉ではなく、二千年以上前に出来た兵

法書『孫子』の言葉である。もとは左のようになる。

其疾如風、其徐如林、侵掠如火、(中略)、不動如山¹⁾

(其の疾きことは風の如く、其の徐なることは林の如く、侵掠することは火の如く、(中略)、動かざること山²⁾の如し、)

『孫子』とは、今から約二千五百年前、中国の春秋時代に活躍した孫武が著したものである。以来、曹操などが注をつけ、武田信玄をはじめとする多くの偉人が『孫子』を読んだといわれている。

『孫子』は、計篇・作戰篇・謀攻篇・形篇・勢篇・虚实篇・軍争篇・九变篇・行軍篇・地形篇・九地篇・火攻篇・用間篇の十三篇からなり、戦略・戦術について説いている。戦略については非常に高いレベルで書かれており、先ほど書いたように、ビジネス書でも使われている。実践・応用が出来れば、これほど頼もしい戦略は無いだろう。

興味を少しでももたれたら、一読することをおすすめする。必ず何か一言、印象に残る言葉があると思う。

三 外交

『孫子』は用兵について述べた兵法書であるが、謀攻篇第三の冒頭で

は以下のようにとなえている。

用兵之法、全國爲上、破國次之、(中略)不戦而屈人之兵、全之
全者也、

(戦争の原則としては、敵国を傷つけずにそのまま降伏させるのが上策で、敵国を討ち破って屈服させるのはそれに劣る。

(中略)戦闘しないで敵兵を屈服させるのが、最高にすぐれた
ことである。)

いわゆる交戦は下策とし、国にかなる損失をも与えないことが最も
よいとする。具体的にいうなればその続きになる。

故上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城、

(そこで、最上の戦争は敵の陰謀を「その陰謀のうちに」破るこ
とであり、その次ぎは敵と連合国との外交関係を破ることであ
り、その次ぎは敵の軍を討つことであり、最もまずいのは敵の
城を攻めることである。)

こうして戦略上、不戦をよいものとして計上するのが、兵法書『孫
子』の特徴であるといえる。それは、計篇第一の冒頭に書かれているこ
とと符合するだろう。

兵者国大事、死生之地、存亡之道、不可不察也、

(戦争とは国家の大事である。「国民の」死活がきまるところで、
「国家の」存亡のわかれ道であるから、よくよく熟慮せねばな

らぬ。)

『孫子』の書かれた当時は現在と違い、国際法といった法の整備がで
きていない。戦争は間違いなく、国そのものの存亡をかけた、何千何万
という民を背負つての争いである。また、戦争は争う国の間のみで起き
るものではない。

夫鈍兵挫銳、屈力殫貨、即諸侯乘其弊而起、雖有智者、不能全
其後矣、

(そもそも軍も疲弊し鋭気も挫かれて「やがて」力も尽き財貨も
なくなつたということであれば、「外国の」諸侯たちはその困窮
につけこんで襲いかかり、たとい「身方に」智謀の人がいても、
とても「それを防いで」うまくあとしまつをすることはできな
い。)

戦争が始まれば、国はそちらに集中せざるを得ない。それを狙って、
近隣諸国が攻め込む場合もある。不意をつかれれば、勝敗は決したもの
である。近隣諸国に対する外交による地固めは、こういうときに重要性
を帯びてくるだろう。

戦争を制するためには、まず外交努力から始まるのである。

日露戦争の場合はどうだったのかを見てみると、そもそも国力に大き
く差がある日露間では、戦争をしないほうがいい、というのが、日清戦
争終了後の日本政治首脳部の考えでもあった。ゆえに、外交努力によっ
て、日本の朝鮮防衛線と、不凍港を求めるロシアの南下政策に折り合い

をつけようとした。

『孫子』にのっとったこの妥当な選択は、しかし失敗に終わる。開戦を選択せざるをえなくなったのである。互いに国の防衛にかかわるため、交渉において妥協することができなかったことが原因としてあげられる。日本側もロシア側も「故上兵伐謀、其次伐交、」は、戦争開始段階では実践できなかった。一九〇四年二月六日に、国交断絶。その二日後には開戦となった。

だが、日本政治首脳部は、これで外交努力をやめたわけではない。同年二月二十三日には韓国と議定書を調印し、日本は韓国の独立と領土保全を保証し、第三国の侵害、内乱によって韓国が混乱した場合、便宜を図るとした。これによって日本は韓国を同盟国とし、朝鮮半島内用兵の点において優位に立った。

清に対しては中立であるように働きかけ、日露の宣戦布告後もその中立を維持するように促し続けた。これは日露戦争によって自国権益を損なわれるかもしれない列国の介入を防ぎ、日露戦争を、あくまでも日露間の戦争に終始させた。

一方、ロシアの外交はうまく運ばなかった。日露戦争のさなか、当時ロシアと同盟関係にあったフランスが、日英同盟を結ぶイギリスと協商関係を結んだことは、その象徴的な出来事としてとらえられる。味方であったはずのフランスが日本の同盟国・イギリスと協商関係を結んだことよって、ロシアは外交的な孤独を起し、日本ははからずしも、「其次伐交」の状態にさせることができたのである。

四 地図

軍部は政治による外交努力の間、着々と戦争に向けて準備を始めていた。『孫子』の点から特に言えるのは、戦場となったであろう朝鮮・中国の地図の製作である。

衛星写真でもって地形が判明する今日とは違い、当時の地図の作成には、現地における測量と人力を要した。日本の場合、日清戦争後に測量を開始した朝鮮については、その作成が間に合ったものの、中国満州近辺については、芳しかなかった。極秘裏に測量部隊を派遣するも、携帯用の測量器具では精度性は格段に低く、現場との違いが歴然と判明するほどであった。

ロシアの場合は、中国満州近辺の地図に関しては精度の高いものを持っていたが、朝鮮の地図に関しては精度が低かった。ロシアも日本と同様に朝鮮に測量隊を派遣している。

『孫子』では土地が戦争に及ぼす影響を、戦争の勝敗を決する五事のひとつにしている。五事七計とは、孫子が戦争の始まる前に、その勝敗を知る際に用いたほうである。逆を言えば、五事を制すれば、勝利は確実ということだ。五事については計篇第一で、

一曰道、二曰天、三曰地、四曰将、五曰法、

〔「五つの事というのは、」第一は道、第二は天、第三は地、第四は将、第五は法である〕

としている。地図に関連するのはもちろん「地」である。「地」とは同じく計篇第一、

地者遠近險易広狹死生也、

(「第三の」地とは、距離や險しさや広さや高低「などの土地の状況」のことである。)

『孫子』では計篇の後、地形篇第十がある。それからしても、『孫子』が「地」を重視していたことがわかる。

日露戦争は旅順・満州近辺とし、朝鮮では会戦が少なかった。ゆえに、「地」の面で見た場合、朝鮮では日本が有利、中国ではロシアが有利となっていたはずなのである。ところが現実には、日本軍の勢いは中国国内にはいつてもさほど衰えなかった。

地の利をもたない日本軍が、なぜ旅順・奉天といった会戦でロシア相手に戦えたのかは、ひとえに運のおかげといえる。五月、戦いの最中に殺したロシア将校兵が持っていた地図を偶然発見し、それを利用したのである。これがなかったら、日本軍は早期に撤退していたのかもしれない。

五 開戦

一九〇四年二月六日、ペテルブルク時間の午後四時に日本とロシアは国交を断絶した。国交断絶を告げた時点で日本は軍事作戦に着手しており、八日、日本軍の奇襲でもって戦端は切られる。

日本はロシア艦船を自沈もしくは大破させ、十日には制海権を得る。陸続きではない日本にとって、制海権は補給路を考えた上で、重要な問題である。大きな問題を片付けると、日本軍は勢いに乗った。

予想以上に順調な進軍は、日本軍部をさらに勢いづかせた。ロシア軍の準備が完全ではなく、朝鮮半島ではたいした攻撃はなかった。このと

き、当初の目的地を何度も変更することもたびたびあったが、『孫子』でいう勢を考えてのことだろう。

勢とは、

勢者因利而制權也、

(勢とは、有利な状況「を見ぬいてそれ」に基づいてその場に適した臨機応変の処置をとることである。)

こうした「勢」を利用しての目的地の変更は、日本の輸送船には迷惑であったものの、さまざまな情報が飛び交うことによって、ロシア軍部を混乱に落とすことに成功した。予期せず、「詭道」に成功したのである。「詭道」とは、計篇第一、

兵者詭道也、故能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、

(中略) 攻其無備、出其不意、此兵家之勝、不可先伝也、

(戦争とは詭道——正常なやり方に反したしわざ——である。)

それゆえ、強くとも敵には弱く見せかけ、勇敢でも敵にはおくびょうに見せかけ、(中略)「こうして」敵の無備を攻め、敵の不意をつくののである。これが軍学者のいう勢であって、「敵情に応じた」の処置であるから、「出陣前にはあらかじめ伝える事の出来ないものである。)

不意・不備をつくことによって敵を乱し、日本軍は『孫子』からいつでも大分優位に立った。

「勢」に乗った日本軍は、ロシア軍を各地で撃破する。満州近辺では

不安材料とされた地図も、五月にロシア将校からロシア製の地図を奪い、水準の高いものを手に入れ、進軍作戦を確実なものとしていたこともある。

当時の日本軍は、まさに勢の状態であったといえるだろう。

激水之疾、至於漂石者勢也、

(せきかえった水が岩石までもおし流すほどに激しい流れになるのが、勢いである。)

ただ、日本軍は『孫子』での有名な文言である作戦篇第二の

故兵聞拙速、未睹巧之久也、

(だから、兵には拙速——まずくともすばやく切りあげる——と言うのはあるが、巧久——うまくて長引く——という例はただ無い。)

これが実行できなかつたようである。戦争ははやく終わらせることが、謀攻篇第三「国を全うする」でも重要だが、日露戦争はそうはならなかつた。

その一因に、旅順などの要塞への攻撃である。旅順攻囲戦は八月十九日から翌年一月二日まで続いた。『孫子』では、謀攻篇第三で兵の数に よってその攻め方を示している。

故用兵之法、十則圍之、五則攻之、倍則分之、敵則能戰之、少則能逃之、不若則能避之、

(そこで、戦争の原則としては、「味方の軍勢が」十倍であれば敵軍を包囲し、五倍であれば敵軍を攻撃し、倍であれば敵軍を分裂させ、少なければ何とか退却し、力が及ばなければうまく隠れる。)

として、敵軍を包囲するのは、軍勢が十倍の時であるとしている。攻城が一番の下策とされている面から見ても、『孫子』においては、日露戦争における失敗はここからはじまる。旅順攻囲戦では数度にわたる総攻撃も失敗し、戦死者も多い。

序盤に比べ、こうした要塞攻撃を始めた中盤、終盤に、いわゆる消耗戦の様相を呈したのは、こうした無謀な作戦によるものであろう。『孫子』では戦争の長期化によるこうした消耗戦を幾度も指摘する。作戦篇第二では

日費千金、然後十萬之師拳矣、其用戰也、勝久則鈍兵挫銳、攻城則力屈、久暴師則国用不足、

(二日に千金をも費やして、はじめて十万の軍隊を動かせるものである。「従って、」そうした戦いをして長引くということでは、軍を疲弊させて鋭気をくじくことにもなる。「それで」敵の城に攻めかけることになれば戦力も尽きてなくなり、「だから」といって」長い間軍隊を露営させて置けば国家の経済が窮乏する。)

こと日露戦争においては、この『孫子』の指摘が耳に痛いほど当てはまる。日露戦争に莫大な金を費やしたが、終盤は日本の圧倒的有利とは

言いがたかった。日露戦争後には、講和条約で賠償金を得られなかった日本首脳部に対する暴動が国内で起き、情勢を不安定なものにした。

六 終戦

包囲戦が続き、戦争自体が長引くと、鉄道を有するために、兵を含めた物資の輸送・補給の点でロシア側が一応は優位に立つ。日本の攻勢にあせったロシア軍部が増大させたこの兵力に、兵の統率や実戦能力を欠くと言う欠点があれば、間違いなく、形勢逆転に至らしめていただろう。

この点を含め、ロシアは優位になる可能性があったにもかかわらず、つぶしていることがなくもない。外交は先ほど述べたように孤立を深め、国内でも、一九〇五年一月二十二日に血の日曜日事件が起き、体制批判をさらに強める方向への追い風になった。

そうした中で一九〇五年三月一日に始まった奉天会戦は、クロパトキン⁴の戦略的撤退によって幕を閉じたが、日本の補給物資が難しくなっていたことを考えれば、辛勝とすらもいえない。追撃の力もなく陸で対峙した陸軍は、日露の膠着を思わせた。

日本は講和を望むも、ロシアが国力で絶対的に勝る以上、この状態で終わることはないからである。

そんな沈黙を破ったのが日本海海戦である。ロシアのバルト艦隊と日本の東郷平八郎率いる連合艦隊が対馬海峡で衝突、ロシアに多くの戦死者を出し、連合艦隊が勝利を治めた。これによってロシアが制海権を得ることが難しくなったため、海を補給路とする日本を確実に降伏させる手だてを失った。

一九〇五年九月五日、アメリカの仲介により、日本とロシアはイギリスのポーツマスで条約を締結する。

賠償金なしのこの講和条約は、日本国内に大きな波紋を呼んだ。日比谷焼き討ち事件は軍と民衆の対立をつくり、藩などの枠組みを超えた大衆運動につながった。疲弊した国内ではその政治の実権が軍部と政治家の間でゆれることになる。

ロシアでは、日露戦争中から始まった国内の内乱に終止符を打つため、選挙法の改正を行った。一票の重みが身分によって違う不平等選挙であることには変わりなかったが、大衆を受け入れることは、後に大きな影響を与える。

七 終わりに

『孫子』は兵法書である。だが兵という言葉には「士卒」のほか、「戦い」という意味も含まれている。それを知ったのはこの『孫子』を読み始めてからで、戦いの始まりから終わりまですべてを見通したこの書物は、確かに現代の、私たちが数多く遭遇する「戦い」においても、通用しそうである。

このレポートを書くにあたって、自分の中の戦争観が変わった。特にいえるのは、その視点の変化である。一個人の視点として、戦争がいけないと言う気持ちに変化は無い。人命が失われることはどんな理由があろうとも、許されるものではないだろう。

ただそこに、国を守る立場と言う視点が新たに加わった。国を守るということは、少ない犠牲でもって、多くの命を救う判断をすることが不可欠になることがあるだろう。国を守ると言うのは、そう言うことではないのだろうか。

『孫子』を読み、軍師・将としての孫武の姿勢を感じた。一個人と言う
枠を超えた孫武の言葉が、多く心に残った。

注

- (1)(2)(3) 本文・書き下し文・訳文については、金谷治『孫子』のものに、
旧字体を常用漢字に改める訂正をした。
- (4) クロバトキンは、陸軍大臣。日露戦争では、ロシア満州軍総司令官。

参考文献

- 金谷治訳注『孫子』岩波書店(二〇〇四・六)
- 浅野裕一著『孫子』講談社(一九九七・六)
- 杉之尾宜生編『孫子』芙蓉書房出版(二〇〇一・十二)
- 横手慎二著『日露戦争史』中央公論新社(二〇〇五・四)
- 崔文衡著・朴昌熙訳『日露戦争の世界史』藤原書店(二〇〇四・五)